

心が白い闇に落ちていくようだ。

「…やあ、あ…ん、…ふふっ、くすぐりたい」

服を脱がされている、と気づくまで時間がかかった。

「これほど色っぽいとは。ずいぶんと信譽に可愛がられていたようだな。おとなしだけかと思っていたが、よほど具合がいいらしい。さて、どんなものか」

やんわりと揉まれる。男の形の変化を楽しむように強く握られ、しこかれていく。

あ…、っん、…興奮…？ どうして…」

驚いて目を睜つたのに、すうっと視線が流れてしまう。

いやだ、と心の内で叫んでも、体が重くて動かない。

悪い夢を見ているようだ。

「おまえはしないのか？ 高樓の主人のくせに、いくらでも娼妓を抱けるではないか。妓郎だつて好きに選べる」

慶興は自分の様でそんなことをしているのか…。慶興の妻の顔が浮かんだが、すぐに頭にかすみがかつてしまう。

急に足を持ち上げられ、蹴つたものの、なよなよとくずれてしまつて寝台から下りられない。

息を切らして睨みつけた目が、差し出されたきせるに吸い寄せられた。ゆらめく煙を見つめて瞳が煌めく。

唇でくわえ、うごとりと喫した。

素直だな、おまえは。昔から俺に優しくされるのが好きだったな。たまに優しくしてやると喜ぶところが可愛らし